

# 「プロ」らしさの装い

## 夢追いバンドマンにとってのプロとアマチュアの距離

名古屋大学大学院 / 日本学術振興会 野村 駿

### 1. 「ペットボトルのラベルをはがす」

\* (筆者、以下同様): ライブ出るときにペットボトルのラベルをはがすのなんで？

レン<sup>1</sup>: あれは、まあ、プロがやってるからっていうだけじゃない？

\*: やっぱり見よう見まねなの？誰かにそうしろって言われるわけでも。

レン: 言われるわけじゃない。まあ、何だろうな。そりゃあさ、いろはす飲んでるんだと思われるよりは、水飲んでるんだなのほうが、まださ。今キャップで分かっちゃうけど、まあかっこつけじゃん。プロはスポンサーがあるからさ。

\*: ああ、そうか、CMとかあるしね。この前、久しぶりにライブ行ったら、若手の子がいろはすのペットボトル持ってて、あれ？と思って。

レン: そう思っちゃうからってことだよな。やっぱそりゃさ、ビール飲んでる人も、Heinekenのほうがちょっと洋物っぽい感じ出るし。雰囲気づくりみたいな。

筆者は、若者の夢追いを研究するべく、2016年4月から現在に至るまで、継続して愛知県に所在する複数のライブハウスに通い、そこで活動するロック系バンドのミュージシャン(以下、バンドマン)を対象に調査を行ってきた。その中で疑問に思ったことの一つが、先のやりとりに示した内容である。つまり、バンドマンたちはライブハウスのイベントでステージに立つ際に飲み物を持参するのだが、そのほとんどがラベルをはがしたペットボトルを持ち込む。なぜラベルをはがすのか。本稿では、この些細な事実から、プロとアマチュアの境界線について考えてみたい。

まず、冒頭の語りに注目しよう。レンはラベルをはがす理由について、「プロがやってるからっていうだけじゃない？」と述べる。つまり、「スポンサーがある」プロを真似て、夢追いバンドマンたちも「かっこつけ」てラベルをはがすのである。そして、それは一種の「雰囲気づくり」実践でもある。

このように、ラベルをはがすという行為から浮かび上がるのは、自身は決して「プロ」ではないが、少しでも「プロ」に近づこうと、「プロ」らしい振る舞いをするバンドマンの姿である。別言す

<sup>1</sup> 以下、語りを引用する場合には、仮名(調査時年齢、性別、最終学歴、雇用形態)の形で研究参加者の情報を記す。レン(27歳、男性、大学中退、フリーター)、2019年9月21日インタビュー。

れば、夢を追っているという点で未だ「プロ」にはなりえていないが、「プロ」を目指しているという点で「アマチュア」とも言い切れない、プロ/アマチュアの両極から距離を有し、そのスペクトラム上のいずれかの地点に位置するのが夢追いバンドマンなのである。

そして、筆者は、この中間的な領域を「職業達成過程」として位置づけた(野村 2019)。つまり、離学後に職業達成を目指しているが、未だに到達していないという固有の期間である。夢追いバンドマンたちは、そこでさまざまな他者とのネットワークをつくり、ライブイベントの出演機会や具体的な助言などを得て、活動していた<sup>2</sup>。

では、そのようにして活動するバンドマンたちは、プロなのだろうか。それともアマチュアなのだろうか。次節では、この点を検討するために、プロ/アマチュアの定義をめぐる先行研究の議論とその問題点を指摘し、本稿のパースペクティブを明確にする。

## 2. プロとは何か、アマチュアとは何か

まず、考えなければならないのは、プロやアマチュアとはいったい何なのかということである。宮入(2008: pp.64-65)は、「プロフェッショナル」のミュージシャンを「大手レコード会社や音楽プロダクションに所属し、音楽だけで生計を成り立たせることが可能な者」と述べる。そして、「音楽を職業としている」「プロフェッショナル」ミュージシャンに対し、そこに「スター性、有名性や知名度といった『権威』が含まれている」存在として「プロのミュージシャン」を指摘する。つまり、権威性の付与によって「プロフェッショナル」と「プロ」の区分が可能であり、「プロフェッショナル」には、本業・副業を問わず音楽を職業としているミュージシャンと、経済的側面に加えて『権威』という社会的地位を獲得しているプロのミュージシャンが含まれている。

ここで重要なのは、プロフェッショナル/プロを定義する宮入自身によって、その定義の限界がすぐさま付け加えられていることである。「たとえば、音楽からの収入に頼らずに音楽活動をするミュージシャン、かつては一世を風靡したが現在ではアルバイトで生活費を稼がなければならないミュージシャン、あるいは、音楽以外に職業を持ちながら音楽活動からも収入を得ているミュージシャン」(同上: p.65)というように、ひとたび定義をすれば、それに該当しない事例が数多く思い浮かぶという状況である。

こうした定義づけの困難さに直面して、私たちは視点を転換させる必要がある。つまり、外在的にプロとは何か、アマチュアとは何かと問うのではなく、当該文化実践者の視点から内在的にプロ/アマチュアについて考えるというアプローチである<sup>3</sup>。これまでの定義の多くは、ともすると研究者の視点から外挿されたものであった。したがって、文化実践者がそれをいかに意味づけている

---

<sup>2</sup> また、彼らは他のバンドマンの動向をよく知っている。夢を実現していったバンド仲間の軌跡や夢を諦めた者の理由などを、情報として広く共有することで、多様な参照点を創出し、不確実性の高い夢追い=職業達成過程を乗り切っているのである(野村 2018)。

<sup>3</sup> 同様の視点に基づいて、筆者は夢追いバンドマンたちが自身の活動を「仕事」とみなしているのか、それとも「趣味」とみなしているのかを検討した(野村 近刊)。

のかは十分に明らかにされていない。夢追いバンドマンたちは自身をプロのミュージシャンとして認識しているのだろうか。それともアマチュアとして位置づけているのだろうか。また、そもそもプロやアマチュアのミュージシャンをどのような存在として捉えているのだろうか。本稿は、夢追いバンドマンの認識に依拠することで、これらの問いに答えるとともに、プロとアマチュアの境界線を考えるための新たな視点を提供するものである。

### 3. 「プロ」として活動する「アマチュア」の実践

以上の検討を踏まえ、本節では筆者が行ってきたインタビュー調査の結果を用いて、夢追いバンドマンたちによるプロ/アマチュアへの意味づけを確認しよう。まず指摘すべきは、夢追いバンドマンが他者から「アマチュア」とみなされやすい点である。彼らの多くは、大手レコード会社や音楽プロダクションに所属することなく活動しており、中にはライブイベントごとに課されるノルマすら達成することが困難な者もいる。音楽活動のみで生計をたてられている者も少ない。ゆえに、フリーターや正社員として働きながら活動することになる。こうした彼らを「アマチュア」と評することは、一面では正鵠を得ているように思われる。

そして、そのような認識は夢追いバンドマン自身にも自覚されている。次のマナブのように、プロのバンドマンの活動と対比させて、「自分らはプロじゃないな」と語られるのである。

\*：仕事って感じでもないんですね？

マナブ<sup>4</sup>：違いますね。でも、どうなんだろな。すごい難しい線引きです。あの、プロの人たちって、それが仕事じゃないですか。自分たち以外の人たちからその成果を期待されて、それに応えるためにやるべきことをやって。だから締切だったりノルマだったりがあるわけじゃないですか。それが曲作りだったりライブのクオリティだったりにつながってきて、プロっていう仕事になってるわけなんで。自分らはプロじゃないなって、そこは。やりたいようにやってるし。でもやっぱり期待には応えたいし。だから、練習だったりとか、あとはレコーディングの期日が迫ってたんで、それまでに寝る間も惜しんで曲作りしたりとか。そこまでやる必要ある？って思われるくらい打ち込んでるのに、でもやめようと思えば辞められるところにいるんですね。

しかし、ここで強調したいのは、「自分らはプロじゃないな」と語るマナブが、「アマチュア」という立場に決して甘んじているわけではないということである。「やりたいようにやってる」が、「でもやっぱり期待には応えたいし。だから、練習だったりとか、あとはレコーディングの期日が迫ってたんで、それまでに寝る間も惜しんで曲作りしたり」と、単なる趣味の範疇では捉えきれな

---

<sup>4</sup> マナブ（男性、27歳、大卒、正社員）2017年11月8日インタビュー。なお、この語りについては、野村（近刊）において、仕事/趣味の意味づけを問う分析の中で詳細に検討している。

いほどに<sup>5</sup>、精力的な活動を行っているのである。

そしてそれは、彼らが夢追いバンドマンである点を踏まえることで理解できる。つまり、「プロ」になることを目指して活動しているがゆえに、「アマチュア」からの異化と「プロ」への同化が確認できるのである。冒頭で論じたペットボトルのラベルをはがす実践や、次のタカが述べる「ファンに与える情報を精査する」実践も、「プロでやってる」という「プロ意識」に基づいて、まさに「プロとアマの違い」が認識されるがゆえになされる行為であるといえよう（なお、次の語りは、タカの所属するバンドが解散する際に、その情報が全く出回らなかった点に言及したものである）。

\*：大抵、情報は誰かしら入ってくるんですけど、全く入ってこずに Twitter で見てびっくりしました。

タカ<sup>6</sup>：そうですね。全く出さないようにしてましたね（笑）。そこはやっぱり、別部分じゃないっすかね。プロ意識じゃないっすけど、でもそこも1つの意識だと思うから、お客さんと仲良くしすぎるのはいいけど、情報を与えるのは絶対漏れるから。感謝もするしありがたいとも思っているし大事にするけど、一線は一線で置かなきゃいけない部分はある。それこそ、ね、僕らインディーズですけどメジャーバンドだろうと何だろうと本当のバンドはそういう情報出さないじゃないですか。ていうのと一緒だと思います。そこはやっぱ、プロとアマの違いだと思います。僕はほんとプロでやってるっていうあれなんで。

では、以上で語られる「プロ」とはいかなる存在なのか。「プロ」らしい振る舞いや「プロ」としての意識が語られたことを踏まえて、この点についても考察しておきたい。それは、端的には客としてライブイベントに参加する者へのまなざしに依拠している。次のリョウの語りは、彼が音楽専門学校在籍時に「ライブ実習」の授業で学習した内容に関するものである。

\*：専門学校でライブのときに言っちゃいけないことが3つあるって習ったんですよって言ってましたよね。緊張してますとか。

リョウ<sup>7</sup>：あー、はいはいはい。

\*：専門学校ってああいうこと習うの？

リョウ：まあ、ライブのやり方として、やっぱ対お客さんなわけじゃないっすか。で、お客さんはお金払って楽しみに来てる、そういう人たちに対してマイナスイメージになるようなことは言わないことにしよう、みたいなこととか。なんすかね。なんか、精神論的な。授業で言うっていうよりも、先生がライブ実習とかっていう授業があるんですけど、そういうときにライブに対する精神論みたいなことと言ってたんですよ。もっと、ある種プロっぽくなれみたいなイメージで言ってたんですよ。

---

<sup>5</sup> マナブは別の箇所でも、「趣味で終わらせるには知りすぎたし、好きになりすぎたし、ほんまにめっちゃ好きやから、ないがしろにしたくない」と述べている。

<sup>6</sup> タカ（27歳、男性、専門卒、フリーター）2017年7月21日インタビュー。

<sup>7</sup> リョウ（23歳、男性、専門卒、フリーター）2016年9月12日インタビュー。

リョウは、ライブイベント中に「ライブのときに言っちゃいけないことが3つある」という話をした。それは、「緊張してます」や「練習してきました」といった内容であり、「ライブに対する精神論みたいな」文脈で学習した知識である。重要なのは、「ある種プロっぽくなれみたいなイメージで言ってた」という語りである。ライブイベントに来る「お客さんはお金払って楽しみに来てる」。そうした客に対して、たとえ「アマチュア」だとしても、一人の「プロ」としてきちんと振る舞わなければならない。客へのまなざしを内面化していることで、「アマチュア」ではなく「プロ」としての自覚が促され、「プロ」らしさが求められるのである。

#### 4. プロ/アマチュアの境界線を越えて

「プロ」になろうとしている夢追いバンドマンにとって、自分たちは「アマチュア」でもなければ「プロ」でもない。この知見を踏まえれば、プロかアマチュアかを問う理解の仕方には大きな限界があるといえる。本稿の検討から明らかになったのは、プロ/アマチュア間の空隙の広さであり、そこを表す適切な概念が存在しないことである。

そのうえで、重視すべきは、「プロ」ではないが、「プロ」らしさを装う夢追いバンドマンの実践である。彼らは、客観的に見れば「プロ」ではないが、あくまでも「プロ」として振る舞っている。今後求められるのは、こうしたプロ/アマチュアという境界にあって、それらの概念では適切に把握できない事象に対し、当事者の認識から然るべき概念を編み上げ、プロ/アマチュア間に広がる空隙を少しでも埋めていく作業である。そして、最終的にはプロ/アマチュアという二元論的な枠組みを瓦解することで、音楽文化を捉える視点も実態に即したより豊かなものになっていくと考えられる。

##### [ 付記 ]

本研究は、JSPS 科研費（課題番号：19J15481）の助成を受けたものである。

##### [ 文献 ]

宮入恭平、2008、『ライブハウス文化論』青弓社。

野村駿、2018、「ヒト＝メディアとしてのバンドマン 共有される夢の実現/断念物語」岡本健・松井広志編『ポスト情報メディア論』ナカニシヤ出版、pp.181-194。

野村駿、2019、「不完全な職業達成過程と労働問題 バンドマンの音楽活動にみるネットワーク形成のパラドクス」『労働社会学研究』20: pp.1-23。

野村駿、近刊、「夢追いバンドマンにとって音楽活動は趣味なのか、仕事なのか」宮入恭平・杉山昂平編『「趣味に生きる」の文化論』ナカニシヤ出版、ページ数未定。